

世界遺産小笠原における「人と自然の接点」～ペット対策の重要性～

澤 邦之（環境省小笠原自然保護官事務所）

まず、遠い南の小笠原諸島世界自然遺産について、この場でご報告できることに感謝いたします。本稿では、小笠原諸島でのペット対策の重要性を、お話をさせていただければと思います。

日本本土の方からすると、世界自然遺産小笠原諸島というと、人の暮らしに関わりのない、手つかずの自然が広がっているのだろうと想像されるかもしれません。でも、実際には、当然、小笠原村内には、2500人近い人々が暮らしており、その中心である父島、母島、硫黄島はもちろん、今では無人の属島にも、第2次大戦の戦跡も含め、昔、人が暮らしていた跡が残されています。小笠原諸島で、有史以来、完全に無人であった島は、南硫黄島だけだとされています。

小笠原諸島は小さな島なので、人と自然との暮らしは、となり合わせで接しています。大自然のとなりの暮らしには、喜びもあれば、悩みもあります。晴れた日に高台に登って広大な碧い海を眺めていると、個人の悩みなど簡単に消えてしまうけれど、大きな台風もその目の前の海からやってきます。人が暮らし始めてまだ200年ほど、太平洋の真ん中にぽつんと浮かぶ島では、まわりの自然があまりにも大きいので、自然と仲良く暮らすための距離感がどんなものなのか、まだ手さぐりなのかもしれません。

そんな、人の暮らしと自然との小さな接点を、島に棲んでいるハトが見せてくれました。アカガシラカラスバトという小笠原の固有の美しいハトです。あまりにも数が少なくなりすぎて、戦後、このハトを見たことのある人は、深い山の中で仕事をする人など、ごく限られていきました。ましてや、集落の中でみるなんて、ありえないことだったはずです。山は山。里は里。小さな島であっても、なかなか、その境目をこえてやってくる動物はいませんでした。

一時は数十羽レベルまで数が減ったアカガシラカラスバトですが、この数年で、急激に個体数の回復が見られます。父島では、外を徘徊するネコがほとんどいなくなったためです。地域のNPOの方々と、東京都獣医師会の皆様のご尽力のたまものであり、行政事業によるネコの捕獲から、NPOによる一時収容、さらには獣医の皆様のお力を借りてネコを馴化して飼育するところまで、どの人気が欠けてもこの成果は得られなかったと考えると、頭の下がる思いです。

さて、冒頭で人と自然との接点について触れました。人とハトは、どういう関係になっているのでしょうか。

まず、ハトの目線で考えてみましょう。父島の山域で、ネコがいなくなりました。結果、ハトは安心して数を増やしました。ハトは飛びます。ハトはエサの豊かな父島の海岸林にやってきました。そこでは人が暮らしていましたが、まだ、ネコもいました。ハトは、ネコに襲われました。これは、2012年8月に実際に起こったできごとです。

これだけではありません。ハトは海を越え、南に50km、20羽近い群れで、母島の集落近くに集まるようになりました。母島では、ネコの試験捕獲に着手したばかりなので、山にも里にもネコはいます。結果、ハトは、ネコに襲われました。2013年7月のことでした。

今度は、同じことを人の目線で考えてみましょう。人目に触れない山の中で、ネコ対策が進みました。これがハトという形になって人の生活圏で見えるようになり、ついには、人の飼うネコが、ハトにダメージを与えるようになったということかと思います。

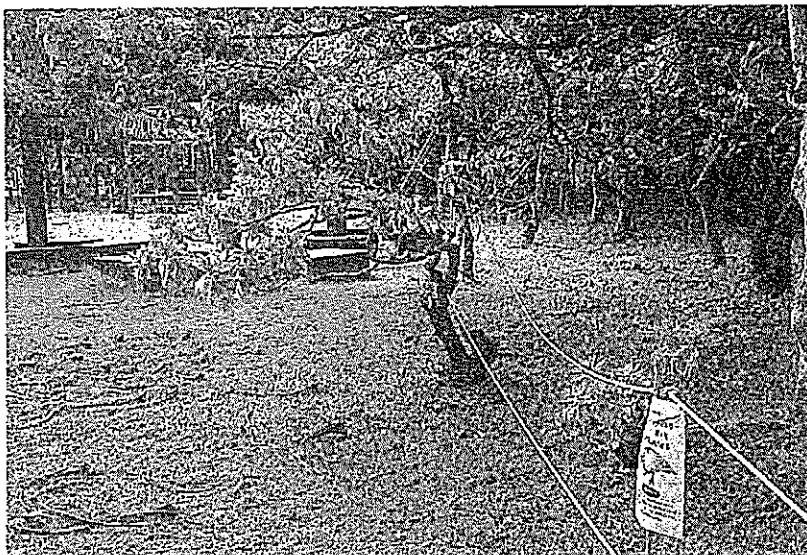
ハトにダメージを与える動物はネコだけではありません。人が島に連れてくる愛玩動物には、フェレットなど、もともと肉食だった動物もありま

す。また、島には、固有の植物や昆虫など、様々な生き物が生息しています。ウサギや熱帯魚に至るまで、人の飼う動物が、人の手から離れて野生に放たれたとき、島の生き物にどんなダメージを与えるのか、よく考えねばなりません。

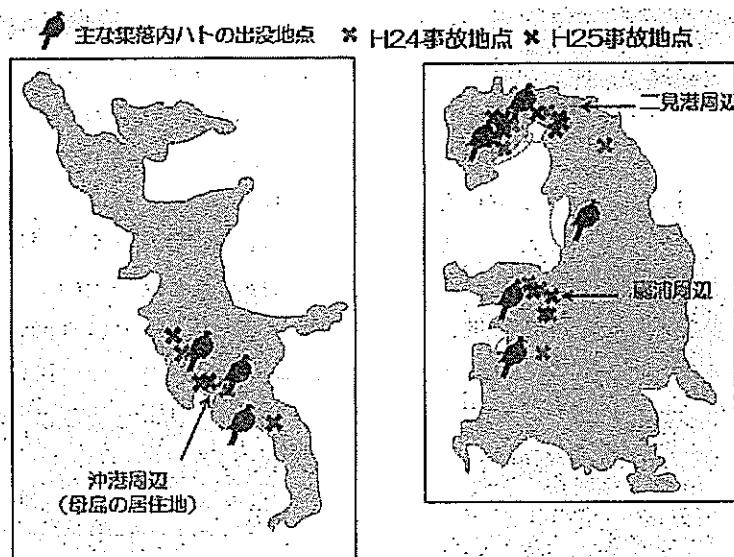
アカガシラカラスバトをはじめとする島の生き物は世界でもこの島にしかいません。その価値が認められて小笠原諸島は世界遺産へ登録されました。世界遺産の価値を守るのは、わたしたち人間の仕事です。そのとき、人の暮らしと自然との接点となる「ペット」をきっちり飼う、つまり、「愛玩動物の適正飼養」が、小笠原諸島の最大の課題の一つだと思います。



アカガシラカラスバト



ハトの現れた公園と「しづかに見守ってね」のサイン



ハトの事故地点

—32—

かわいいペットであっても、自然界に放つと恐ろしい外来種になってしまうという認識の下、現在、環境省、小笠原村をはじめとする関係機関、小笠原自然文化研究所をはじめとする地域の方々を中心として、愛玩動物の適正飼養を考えるワーキンググループを立ち上げようとしています。

これからも、小笠原諸島の自然を守るために、獣医師の皆様から、専門的な知見や、飼い主さんたちとの関わり方について、たくさんのお勧めをいただけたらと思います。